

# ドイツ連邦共和国（西ドイツ）に おける教育者ならびに 学習者としての女性の状況

アンゲリカ ワーグナー

橋 村 良 孝 訳

## は じ め に

心理学の立場からいたしますと、子女教育の歴史は、一般的に考えられてきたような性差に基づく男女間の役割と云う定言の段階的淘汰の過程として捉えることができるのであります。

そこで、私がこれから皆様方にお話致しますのは：

1. 連邦共和国（西ドイツ）の学校ならびに単科大学における学習者としての女性の状況
2. 総合大学で学ぶ学習者としての女性の状況
3. 成人教育が女性の意識の変化をもたらしたことに對する二三の評価

以上についてであります。

教育のこれらの三つの領域における問題は、かつてからあり、そして現に今もある性差に基づく男女の役割についての通念と云うものを如何に変え、そして解消させるか、と云うことであります。

我々は1978年、包括的、経験的な調査を行いながら、広く浸透しております性差に基づく男女の役割と云う通念を学校教育に関連づけて考えてきたのであります。（wagner 1984）

そもそもこの「通念」と申しますのは、社会的ならびに個人的に内面化された概念でありまして、例えば、女性は「かくあらねばならない」とか、「何々してはいけない」と云ったようなことであります。

心理学的な通念と申しますのは、感嘆符で終わる文「何々はしなくてはならない！」とか「何々は必要ありません！」、具体的に例をもって示しますと「女は男のように賢くなくてよろしい！」とか、あるいは「女の子はいつも愛想よくしなさい！」と云った、しばしば聞かされるお定まりの言葉であります。

このような一般化した女性に対する侮辱は内面的な葛藤、やりきれない気持ちや、馬鹿にされたような気分を惹き起こすことが多いのであります。つまり、このような言葉を浴びせかけられた女性は心を引き裂かれた思いをいただき、そして何か「不作法なこと」をするのではないかとか、あるいは、要するにもっとうまく女性的に振舞うことだ、と云った思いを抱くのであります。

歴史的に観て参りますと女子教育の問題は数世紀に渡ってこのような通念によって規定されており、しかもその内の二三のものは今日もなおその効力を發揮しているのであります。

## 学 校

最初のドイツの女性運動の目標は、19世紀半ば以来、それ故に出来るだけ多くの若い女性の適性に合ったより高度な女子教育のための闘争であったのであります。

中世以来、男子と女子は、なるほど国民学校では読み、書き、計算と云った基本的なことは同じように教えられていましたが、しかしながら、もっと高度な教育の場（例えば、——15世紀以来——古典語に重きを置いている高等学校の様な）そのような教育の場は、女子には遙か彼方に閉ざされたままであります。（Brehmer 1987）

18世紀末から19世紀になってようやく徐々にではありますが「比較的高度な女学校」——子女専属の——学校が設立されたのであります。

1895年、上級学校には40,000人の女子と160,000人の男子がいました。

1908年、ドイツの総合大学は女性の為に一般に開放されたものであります。その後、女性の高等学校卒業資格試験合格者の数は急激に増加し、1933/4年には既に28%に達したのであります。

1945年の第二次世界大戦には上級学校の女子の数は徐々にではありますが増加の一途を辿ったのであります。しかし、昔ながらの性差に基づく男女の役割に関する通念はそう大して衰えてはいないのでありまして、50年代ならびに60年代に至りましても、なお多くの親たちは、男の子と同じような良い学校教育は女の子には然程重要ではない、と云っているものであります。そのようなわけで、1960年になってどうにか37%の女子の高等学校卒業資格試験合格者をみたのであります。

60年代の終わりに、おおきな教育の拡大が始まったのであります。それと同時に、僅か数年の内に、実際に、全ての学校に男女共学が導入されたのであります。これまで存続いたしておりました女子高等学校と男子高等学校はそれぞれ異性の為に開放されたのであります。そのことによって、有利になったのは、なんと申しましても女子の方でありました。

今日、高等学校卒業資格試験合格者の50%以上は女子であります。「女の子は男の子ほどそんなにたくさん学ばなくてもよい」と云った古い通念はもはや通用しないのであります。女子にとっても男子にとっても良い学校教育は同じように大切なものであります。

一般的に男女共学が導入されて以来、女子も男子もすべての学科において同等の授業が行なわれています。男子も女子も同じように家庭科並びに工作の授業に参加するわけですが、この場合大切なことは、必須授業であると言うことであり、しかも男女とも同じ教科書を使用し、そして同じ課題をこなすことであります。

この間、女子は平均して男子よりも良い成績を取り、彼女たちは男子と比

78 ドイツ連邦共和国(西ドイツ)における教育者ならびに学習者としての女性の状況  
較して留年は少なく、そして特殊学校へ委ねられるのも男子よりも少ないのであります。

大方の教諭並びに女教諭は、男子も女子も授業では同等に扱っていると、信じて疑っていないのであります。しかしながら、実態調査に依って判りましたことは、かなり多くの古い通念が——明らかに弱まっているとは云え——相変わらず生きていと云うことでありました。と申しますのは、例えば男の先生も女の先生も女子に比べて男子生徒に声を掛けることが多く（5対4）、しかも先生方は男子生徒を女子生徒よりも褒めているのであります。

教科書調査では、この場合、性差に基づく男女のステレオタイプが無意識に作用していることが明らかになっております。

成程、教科書批判があつて20年になりますが——直接差別するような表現はごく希にしかありませんが、しかし詳しく分析いたしますと、例えば、図版、練習用例、——算数の教科書に於いてさえそうなのでありますが——歴史の教科書の中に出てくる女性をみましても、この性差に基づく男女のステレオタイプの影響が見られるのであります。二三の連邦州では、ですから、その間に教科書委員会が設定され、現在では委員会が教科書を許可する前に再調査する仕組みになっているのであります。

## 単科大学と総合大学

11世紀に最初のヨーロッパの総合大学が創設されたのでありますが、これらの大学は19世紀の終わりまで、もっぱら男子の為のものであります。ドイツの大学では、1908年にやっと女性が学究者として一般に（最初のドイツの女性運動が起こつて50年後）認められたのであります。

今日ではドイツ連邦共和国の単科大学で学ぶ学生の44%が女性であります。

日本や二三の他の国々とは異なつてドイツ連邦共和国では、特別なエリート単科大学とか女子大、あるいは「ジュニアカレッジ」と云われる2年制

の大学（短期大学）はありません。

単科大学の男子卒業見込者ならびに女子卒業見込者は通常4年から6年の課程を修了するのであります。そして彼らは職業資格を得るのであります。

今、かりに個々の分野における女子学生の分布を具体的に見てみますと、これは全く今以て同等ではないのであります。つまり、情報処理論の分野では、例えば、ハンブルグ大学では現在僅か15%の女子学生にしか過ぎません。他方、経済の分野では女子学生の割合はその間に30%以上にも増加している所以であります。

全体的にみますと、単科大学の卒業生の内にしめる女性の割合は次のようになっております：

言語—文化学／スポーツ	62.5%
芸術—芸術学	61.1%
農業—森林—及び食品学	42.6%
法律—社会学	39.5%
数学—自然科学	37.4%
医学	34.3%
技術系	10.5%

ここ数年、殊に自然科学ならびに技術系に進む女性の減少傾向が歴然としておりまして、批判的な論議の対象になっております。女子は成程、男子同様に才能もあり基礎学校（西ドイツの4年制の小学校）においては男子と同じように算数・理科の分野でも興味を示しているのはありますが、女の子がそれ相応の男女の性の役割に関する通念を内面に秘める年ごろ、つまり思春期を迎える頃になりますと、関心の度合いがはっきりと後退するのであります。この現象は男女共学の学校において、まだごく僅かしかない女子普通高等学校（ギムナジウム）におけるよりも、強く現われているのであります。この理由として、これはあくまでも推測ではありますが、女子に対する男子の振舞いにあるのではないか、つまり男子には、女子を萎縮させ、しかも女子をコンピューターから追い出してしまう傾向があるのではないかと、

80 ドイツ連邦共和国(西ドイツ)における教育者ならびに学習者としての女性の状況  
考えるのであります。

それで、現在、一つ一つのモデル実験の形で、これらの分野で女子から男子を一時的に切り離して授業を行い、女子の動機について、確実に影響を及ぼしているかどうかの調査がはじめられているところであります。

### 若い女性と男性の生活及び職業の計画について

学校並びに単科大学での学習者としての女性の割合はここ数十年の間に著しく増加したことは、新しい女性運動の影響を反映し、このことによって、60年代のはじめ以来、「主婦や家庭の母」と云う昔ながらの古い理想像はとって代われ、例えば子供のため二三年の間中断することがあっても、夫同様に自分たちの職業に真剣に取り組む女性の新し姿が生まれたのであります。若い女性にとって、なにはともあれ職業は若い男性たちにとってと同様に重要なのであります。

1988年の18才から33才の中から抽出いたしました夫婦のアンケート調査によりますと、80年代の父親たちは週のうち1日に約2.5時間、毎日子供達の為に時間を割いています。もしふた親が職についている場合、父親たちは彼らの妻の査定通りに家事の1/3を行っていて、もし妻が職についていない場合には、夫たちは家事の1/4を引き受けていると云うことであります。夫たちはですから、はっきりと家庭に、確かに10年前と比較致しましても、真剣に取り組んでおりまして、いわゆる「新しい父親としての在り方」が職業と両立するかぎりにおいて、実際にそのような生活がなされているのであります。質問を受けた父親たちのまる半分为、子供達のことでの悩みに手を貸し、しかもそのために職業上の制約を余儀なくしている、と告げています。

今日それ故、若い女性は、男性と同じように次の二つのことを望んでいるのであります；つまりそれは、彼らは、職業を——ほぼ半数(43%)が管理職志向であり、そして(彼らの90%)は子供を欲しがっていると云うことであります。3才以下の子供を持つ母親たちの23%は職業に携わっているので

す、つまり、妻の多数は彼らの職業の前後、数年間ではありますが、子供達のために職場を離れるのでありますが、母親の多くは後になって、今度はパートタイマーとして働くのでありますが、この場合、昇進ははっきり云って困難であります。普段午前中に終わってしまう学校もそうなのですが、今だに連邦共和国では、保育園や保育所の減少があまりにもひどく、この事が職業と家庭を両立させることを難しくしているのであります。

### 総合大学における学習者としての女性

先生の半数以上が女性である、いわゆる学校とは違って、単科大学での教育者としての女性はまだごく僅かしかいませんで、女性の割合は：

学生：	44%
ドクターの学位取得者：	26%
研究助手：	13%
大学教授資格取得者：	7%
教授：	5%
(大学の) 講座担当教授：	2.6%

となっておりまして、所謂「ピラミッド」型の分布が見られるのであります。

近年、この分布と申しますか割合に関する根拠について激しい討論がなされたのであります。これに対する根拠（何故こうなるのか、何故こうなったのか）は実に多様でありまして、伸び盛りの年頃の児童教育と学問的な適性との関連づけにはじまって、そして教授への道を目指している男性の同僚や単科大学の先生の落胆の多少に至るまで、これははじめから大変難しいことであります。

あるアメリカの研究によりますと、「たまたま」名前が女性の名であると云うだけで学者先生たちによって、申請書類（業績）が悪く評価されている事が明らかにされております。女性の判定評価については、女性によって

も、男性と同じように、例えその資格（能力）が男性のものと同じであっても、無意識に低く評価されるのであります。

ハンブルグ大学は初の西ドイツ連邦共和国の大学として、4年前、研究職員について、女性の配分を高めるために、特別の方針を導入したのであります。この方針に依りますと、採用並びに任命の際、委員会において出来るだけ2人の女性を加えること、そして同等の資格のある場合には女性を優先的に採用または任命するように定めています。これ以外に全ての専門分野において、この方針を実施するために女性の委員がいます。この結果、ハンブルグ大学では助手への女性の配分が3年の内に17%から22%に上昇したのであります。招聘に際しては数的な増加はまだ確定いたしておりませんが、しかし、いずれに致しましても緩やかな意識の変化が兆しておりまして、人事委員会は今では既に女性教授任用（招聘）に照準を当て、しかも女性後継者は一層強く要請されているのであります。

目下のところ連邦共和国では、女性の学問的後継者の要請に対して数的に的を絞り一定の割合を取り決めるまでに話し合いがなされ、既に一部では法律化され、暫時定められつつあります。

これを背景にドイツ社会民主党 SPD（二大政党の一つ）によって、最近決定されました割合（配分規定）がかなり社会の意識の変化に寄与したのであります。SPD（ドイツ社会民主党）では、議会の党員候補の指名の場合と同様、将来あらゆる委員会に少なくとも40%の女性代表が必ずや出るに違いありません。数年にわたる討議の末、この決定が大多数を以て可決されて以来、「配分規定」には、まだまだ議論すべきことは残されていますが、かなり「上流社会にふさわしい」ものとなったと云えましょう。多くの女性はこの措置を——まだこれには、かなり多くの不利な点があるとしながらも——、一応現在のところ、これが唯一であるが故に、基本法の平等の精神を最終的に実現化する最善の策として評価しているのであります。

経済界におきましても、現在、独自の女性要求計画を、管理職への（現在約3%）女性の配分を長期的に高める目標を定め、発展させている大企業が

あります。ここでは、社内で教育を更に続ける事が重要な役割をはたしているのです。90年代における後継者不足を目前に控え、女性のめざしている要求から致しなくても、全く、経済界に対し、学問の世界におけると同様に、独自の関心を示しておりますものの、しかしまだまだ大変多くのなすべきことが残っているのです。

### 成人教育による婦人の解放

性差に基づく男女の役割についての通念の変化と解消が、今日では学問研究の対象となっております。最近15年のうちに、批判的並びにフェミニズムの女性研究が生まれております。この女性研究（主に女性によって進められた）は：女性の記録（生涯）、堕胎、職業上の成功、女性に対する暴力、家事、教材の中の女性、歴史の中の女性、国際比較による女性研究、女性と政治、女性と性、中年女性、学校及び学界における女性、婦人解放運動と心理療法、女性の独自性と男性の独自性、と云った、これら諸々のテーマと取り組んでいるのであります。

女性社会学者、女性教育学者、女性哲学者、女性文学者、女性芸術史家、女性技術者、女性自然科学者やその他の人たちによって、独自の研究者連盟（団体）が組織され、他にも色々ありますが、専門の会議が特に規則的に開かれているのであります。

この女性研究の成果は、単科大学や総合大学での教育の中にも入ってきており、そこでは、これまで真剣に取り組んできた女性研究者が講師や教授として活躍しており、彼女たちは適合したゼミナールを提供しているのであります。と申しましても、これまでのところ独自の（女性研究）の研究課程は、まだ連邦共和国にはございません。

女性の意識の変化に重要な役割を果たしているのは市民大学（成人学校）であります。この市民大学は、基礎知識とか年令などに関係なく、誰にでも開かれているものであります。ここ10年の間に、この市民大学は、特に、女

性の為のゼミナールを女性をテーマにした講座を一段と増やしており、例えば、女性と文学など、これは大変人気があります。

これと並行して、70年代の半葉以来、女性の対話グループが、女性の頭の中にある性差に基づく男女の性の役割に関する通念を取り払うのに重要な役割をはたしているのです。この女性対話グループはアメリカ合衆国の「コンサーサネス・レイスイング・グループ」(consciousness-raising groups)を手本にしており、ここでは女性としての独自の経験が中心となっているのです。

女性対話グループは6人乃至10人の女性から成り立っており、1週に1度の割合で会が持たれるのです。毎回一つのテーマが中心になります、(例えば、少女としての独自の体験、パートナーとの交際、職業、性など)このテーマについて、出席した女性は自分たち自身の体験について順次報告し、誰かが報告している間、他の出席者はその体験談に耳を傾けるのです。このようにいたしまして、女性に関する様々な実際の姿が現れるのです；つまり、女性参加者の多くは、これまで、自分だけの問題だと思っていたことが、実際には、女性にとって共通の問題であると云う事を、発見するのであります。この認識こそが意識を変えるのであります。70年代および80年代の早期において、10,000ものこのような対話グループが生まれたのであります。これらのグループから、おおくの活動的な女性が女性運動の中に出てきたのであります。今日では、この対話グループの他に、心理学的ならびに一部では心霊的な女性の自発的体験グループも現われております。

成人教育の領域には、その他、職業婦人や家族の世話をする時期を終えた後(35才から)、再び職場に戻ることを願っている、女性たちの為の数多くの教育(人間形成)のゼミナールがあります。女性の為の女性修辞コース(女性がはっきりした文章で表現できる訓練コース)や自己主張コース(集団の中でも自分の意志をはっきり伝えることが出来るように訓練するコース)についての問い合わせも増えております。

要するに、現在、指摘されておりますことは、多方面に渡って出来つつあ

ります職業婦人のネットワークの事なのであります。ハンブルグでは、私どもは最近エキスパート（女性専門家）による相談所のネットワークを作りました。そこでは、退職した女性が、中年女性に職業的一専門的に就職問題に関する相談に乗っているのであります。

## 結 び

今日、高等学校卒業資格者の50%以上とそれに単科大学卒業者の40%が、ドイツ連邦共和国におきましては、女性であります。このことが、とりもなをさず子女教育における性差に基づく男女の役割に関する通念の解消に大いに役立っているのであります。次代のテーマは、殊に家庭と職業との調和の問題、経済界並びに学問分野での女性の登用の問題、および女性にとって代表的でない分野（例えば、理工系の分野）での女性への配分増でありましょう。

私どもは、この点に関しましても、現実を直視した場合、これから先、何年かかるか判りませんが、たとえ数十年かかろうとも、必ずや、古い昔ながらの性差に基づく男女の性の役割に関する通念は、徐々に解消し得るものと、大いに気をよくしているところであります。

### 訳者あとがき

本学の二関教授の企画により、女性学講演会が一昨年5月、中央講堂において催され、「学習者および教育者としての女性」の題目でハンブルグ大学副学長アンゲリカ ヴァグナー女史が講演されました。その際片上講師と私が通訳のお手伝いをさせて頂きました。これはそのときの原稿の訳であります。日本語の活字にすることの許可を女史からいただいておりますことをここに記しておきますと共に、ヴァグナー博士の略歴をしるしておくことにいたします。

86 ドイツ連邦共和国(西ドイツ)における教育者ならびに学習者としての女性の状況

略歴：1944年生まれ

1967年ハンブルグ大学卒業

1971年米国ミシガン大学にて博士号取得

1985年よりハンブルグ大学教授，教育心理学担当

1988年同大学副学長就任

著書：「授業にあらわれる男女の性差に基づく一通念」（1978）

「学校生活における精神の葛藤」（1984）

その他。